

絵物語の読者たち

一 長家室の絵物語

万寿二年(一〇二五)の春のころから赤裳瘡が蔓延し始め、たちどころに都を席卷し、多くの人々は上下を問わずその病に苦しめられ、秋になってやっと終息するというありさまであった。『栄花物語』(巻二十五、みねの月)には、

かくいふ程に、今年は赤裳瘡といふもの出で来て、上中下分かず病みの、しるに、初めの度病まぬ人のこの度病むなりけり。

内(後一条天皇)・東宮(敦良親王)・中宮(威子)も、督の殿(尚侍嬪子)など、皆病ませ給ふべき御年どもにておはしませば、いと恐しういかにかにとおぼしめさる。

と、疫病流行の恐怖を語るが、『小右記』にも天皇以下羅病した多くの人々の様子とか心配、悲しみを記述する。『左経記』(七月二十二日)にも「近來天下道俗男女、不論老少惱赤裳瘡之由云々」と記し、病気による影響はかなり深刻な事態にまで進んでいたことが知られる。東宮妃尚侍嬪子は同じく赤裳瘡に患い、八月三日に親仁親王(後冷泉天皇)を出産して三日後の八月五日に十九歳で亡くなるという悲劇も起こるなど、世の人々は不安を思いで過ごしていたに

違いない。

伊 井 春 樹

中納言長家(道長六男)も、『小右記』の八月十二日条に「新中納言長家、右三位中将師房重煩此病云々」とこの頃病にかかり、余病がありはしたがほどなく快癒するにいたる。ところが、それと入れ替えのようにそれまでも悩まされていた長家室(斉信女)の赤裳瘡は、道長が「たゞにもあらぬ人の、大事にもあなるかな」(『栄花物語』巻二十六、楚王のゆめ)と心配するように、十日足らず前に亡くなった嬪子を念頭にしてのことばであろうか、折しも臨月を迎えた彼女は危機的な状態にまで陥ってしまう。やがて、『栄花物語』(巻二十七、ころものたま)によると、

廿六日の昼間にいみじう惑はせ給へば、知る知らぬ多くの僧ども、なりかり加持参る程に、児生れ給ひぬ。「あな嬪し」とおぼして、いつしかまづ見奉り給へば、まことのほどにて生れ給へる児のやうにて、いみじう大きにかめしき男君にてやがて亡くなりて生れ給へるを見つけ給へる大北の方(斉信室)の御心地、いかがはある。

と、八カ月という月足らずの死産であったようで、人々の悲しみのうちに長家室も二十九日に命を失ってしまう。嬪子と同じく出産し

て三日後に亡くなったようで、齊信夫妻の泣きまどうさまや、長家・道長などの悲しみの姿が『栄花物語』や『小右記』にあわれ深く詳細に記述される。

寛仁二年（一〇一八）三月、十四歳（『栄花物語』は「十五ばかり」とする）の長家は十二歳の行成女と結婚し、「雌遊びのやうな生活をするものの、三年後の治安元年（一〇二二）三月十九日に疫病により彼女が亡くなり、同年十一月に二人目の齊信女と結婚することになる。「女君今少しまさり給へるなるべし」（『栄花物語』卷十八、もとのしづく）とするので、その年十七歳の長家より一つ二つ年上であつたらうか。ところが齊信女も、右に述べたように四年後に亡くなり、長家にとつてはわずか七年の間に二人の北方を疫病によつて失うという不幸が訪れたのであつた。長家との年齢差を二年とすると、結婚した当初齊信女は十九歳ばかりであつたと思われ、「御容貌、有様とどのほり果てて、いみじうあてやかに美しくなまめき給へり。御髮丈に多く余り給へり。ただ人に見え給はん事惜しげになん」と描写される女性だけに、行成女の悲しみを癒す思ひからか、彼はしげしげと通うことになる。そこで触れられるのが、「手いとおよく書き給ひ、絵などをもいとをかしう描き給ふ」との、能筆で絵心もあるとのことばで、長家は新しい北方の作品を見るのを楽しみの一つにして訪れてもいたに違いない。

この絵について、もうすこし明らかに記されるのが彼女の没後の長家の追想にかかわる場面において、すこし長いが引用すると、「何事にもいかでかくとめやすくおはせしものを、顔かたちよりはじめ、心ざま、手うちかき、絵などの心に入り、さいつ頃まで御心に入りて、うつ伏しううつ伏して書き給ひしものを。こ

の夏の絵を、枇杷殿にもて参りたりしかば、いみじく興じめでさせ給ひて、納め給ひし、よくぞもて参りにける」など、おぼし残す事なきままに、よろづにつけて恋しくのみ思ひ出でさせさせ給ひぬ。年ごろ描き集めさせ給ひける絵物語など、皆焼けにし後、去年今年の程にし集めさせ給へるもいみじう多かりし、里に出でなば、とり出でつて見えて慰めむとおぼされけり。

（卷二十七、ころものたま）

とする。齊信女が赤裳瘡に患うようになったのは七月下旬からのようで、身重の体だけに折の悪いことと人々は心配するが、その不安が適中するように「月頃いみじう細り、ありし人にもあらぬ御有様をぞ、いかにと恐しくて、様々の御祈をし尽させ給うめる」（卷二十五、みねの月）と、衰弱の途をたどり、祈りにすがることなく状態になつていく。それにもかかわらず、彼女は俯せになりながらも絵を描き続け、夏の間の作品は枇杷殿（皇太后嬪子）に献上して喜ばれたという。

この当時の女性の鑑賞する（絵）というのは、今日的な風景画などではなく、物語と何らかのかかわりがあつたにちがひなく、ここでも物語絵が、すぐ後に記される絵物語を彼女は妍子に差し上げたのであろう。彼女は幼い頃から絵物語に親しみ、長じては筆跡と絵の才能を發揮して自ら書写したり、時には新しい作品を作ることもあつたはずである。ところが、長家と結婚して一カ月ばかり後の治安元年十二月十八日に齊信の大炊御門邸が火災に遭い、「年頃書き集めさせ給ひける絵物語など、皆焼けにし後」と、齊信女の長年かかつて書写などして収集した絵物語はすべて灰燼に帰してしまつたという。さらに治安三年二月十五日には、齊信の棧敷殿も焼失して

しまい（「日本紀略」他）、「大炊御門の焼けにし後、この棧敷殿に中納言殿（長家）住み給ふに……又ほかへ渡り給ひぬ」（卷十八、たまのうてな）と、長家は三度目の殿移りをする事になる。齊信の焼け出された先は、「かの大納言、例おはする所にもあらで、この頃は、中御門に、今の肥後守致光が家にこそ住み給へ。程なども狭き所にていと騒しげなりとぞ」（卷二十六、楚王のゆめ）と、人の家を間借りしての生活だったようで、長家もそこへ通っていたのであろう。

齊信女はすべて失った絵物語を、ふたたびもとのように集めようと努力し、「去年今年の程にし集めさせ給へるもいみじう多かり」と、かなりの数の作品を復元することができた。といつても、一人が毎日宮々と絵筆を走らせたのではなく、結婚にともなつて仕えたという二十人ばかりの女房の働きも大きかつたはずで、いわば彼女はデザイナーとしての役割を果たしたのであろう。彼女がそれほどまでに執着した絵物語というのは、自己の好みだけではなく、いづれ生まれるであろう姫君の読み物として考えていたのかも知れない。長家は「里にいではなば、とり出でつつ見て慰むとおぼされけり」と、残された形見の書写本が、今では唯一の心慰めるよすがであつたという。

二 粟田山庄の絵物語

道兼が粟田に山庄を営むようになるのは正暦元年（九九〇）の春以降だったが、そのきっかけは兄道隆女の定子が正月二十五日に一条天皇のもとに入内し、二月十一日には女御となるなどのはなやかに目を当たりにし、自分にも姫君が生まれてほしいとの望みに起

因したようである。道隆には定子だけではなく、その妹に小姫君の原子もいるなど、将来の中関白家の栄花と安泰を思うにつけ道兼はうらやましい限りで、なんとか本妻の遠量女腹に姫君の誕生を祈らずにはいられなかつた。といつても、藤典侍繁子（師輔女）との間にすでに七歳になる娘尊子がいたのだが、この方は劣り腹であつたことによるのか、かわいがらうともしなかつたという。

粟田といふ所にいみじうおかしき殿をえもいはず仕立てて、そこに通はせ給て、御障子の絵に名ある所々をかかせ給ひて、さべき人々に歌よませ給ふ。世の中の絵物語は書き集めさせ給ふ。女房数も知らず集めさせ給ひて、ただあらましごとをのみ急ぎおぼしたるも、おかしく見奉る。（卷三、さまさまのよろこび）

道兼は粟田殿を造り、そこにせつせと通つて美麗をはかり、後はひたすら姫君の誕生という「あらましごと」を気の焦るような思いで待ち続ける姿に、人々は「おかしく」見申し上げていたという。彼の念頭には、この粟田で姫君を育て、やがては后がねにしたいとの思いがあつたのは確かで、たんに一人の姫君がほしいとの願いだけではなかつた。長徳元年（九九五）四月二十七日に三十五歳の道兼は関白に昇進、折しも遠量女は懐妊してただけに、いよいよ長年の夢が実現するものと、邸内にはなやいだ雰囲気となる。ところが、道兼は世に「七日関白」と呼ばれるように、五月八日に急逝し、その後になつて遠量女は女兒を出産したのである。この姫君が、二十三年後の寛仁二年（一〇一八）に、二条殿の御方と称される女房として、道長の強い求めによって尚侍威子のもとに出仕するという、生前の道兼は考えもしなかつた運命が訪れることになる。

道兼が姫君を持ち、兄道隆の定子のように入内させたいと望みを

抱いた折、彼の念頭に浮かんだのは風流を施した建物と多くの女房たち、それに絵物語を収集することであった。障子絵に押しした名所歌は「恵慶集」にその一部を見いだすが、「江吏部集」によると漢詩も作られたようである。それとここで注目されるのは、「世の中の絵物語は書き集めさせ給ふ」とする道兼の企で、彼は当時流布する絵物語の大半を書写させたという。彼の脳裏には姫君の誕生と、絵物語に囲まれて成長し、やがて美しく成長するという姿が思い描かれていたに違いなく、兄の道隆の姫君達もそのようにして育てられたのであろう。すると絵物語というのは、姫君にとつてのいわば教科書的な存在とみなされていたわけで、それを読ませせることは后妃への重要な階梯と考えていたと知られてくる。姫君への教育としては、師尹が入内前の芳子（村上天皇女御、宣耀殿）に、「一には、御手を習ひたまへ。次には、琴の御琴を、人より異に弾きまさらむとおぼせ。さては、古今の歌廿卷を皆うかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」（「枕草子」角川文庫本、二〇段）と諭したことが広く知られるが、その表向きの教養のほかには彼女が絵物語も数多く目にしてはいたはずである。

当時の姫君たちは、絵物語（女性の読む物語は多く絵入り本であったと考えられる）が女性の娯楽として、また男性との世の中を知れる教科書として読まれてきた。しかし、それも結婚するまでのことで、夫が通うようになるともはや絵物語からは離れ、むしろ現実の世界に眼が向けられるようになってくる。道綱母などは「世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり」（「蜻蛉日記」序）と、物語世界のいつわりごとを鋭く批判し、結婚生活の実態を「天の下の人の品高きやと、問はむためしにもせよか

し」と、あからさまに綴っていく。彼女が読んできた物語というのは、結婚によつて幸福を得た女性の物語が大半だったようで、少女の頃からそれなりの憧れと夢を抱いて成長してきたのだろう。ところが結婚生活を知るに及び、それまで培われた世界との落差に驚愕し、物語とはすっかり異なる「品高き」男性と結婚した厳しい現実の存在を、彼女は日記という作品によつて縷々と訴えることにしたのである。しかし、そのような態度は希有な例で、多くの女性は結婚とともにすっかり物語などを忘れるか、齊信女（長家室）のように、結婚後も物語と深い関係を持つ場合すらあった。

「三宝絵」の序において、為憲が「物語といひて女の御心をやるものなり」と述べ、動植物譚には「浮べたることをのみいひなし」「誠なる詞をば結びおかずして」とし、恋愛譚には「罪の根、言葉の林に露の心もとどまらじ」と批判するのは、当時の物語への一般的評価ではなく、仏道を勤める尊子内親王（冷泉天皇第二皇女）に対する特殊な言辭であったことを留意する必要がある。尊子は三歳で齋院に卜定され、母の女御懐子の喪によつて退下、後円融天皇の女御として入内したものの、二年後の天元五年（九八二）に剃髮（十七歳）、寛和元年（九八五）に没するという薄命であり恵まれない生涯であった。絵をともなつた仏教説話集の「三宝絵」が献上されたのは、出家して二年後の永観二年（九八四）十一月のことだが、この種の本が今さら必要とされたのは、尊子の仏道入りが名ばかりで、齋院以来の物語への関心から抜け切れなかったことによるのではないか。尼姿になりながら、彼女は物語に夢中になり、とかく勤行がおろそかになりがちであったため、冷泉院の要請により、ことさら物語の真実のない、むしろ罪の書とする立場が強調される

にいたったと考えたい。逆に、それだけ物語が若い女性たちに深く浸透し、熱狂的に受け入れられていた証左でもあろう。氾濫する物語の存在を無視することはできず、むしろ親は姫君の教育として積極的に利用もしていったと思われる。

明石姫君を養女とした紫上も、「姫君の御あつらへにことづけて、物語は捨てがたくおぼしたり」(蜚)と、絵物語を収集していた一人だが、光源氏がふと「くまの物語」に目をとめ、「姫君の御前にて、この世馴れたる物語などな読み聞かせたまひそ。……かかること世にはありけりと、見馴れたまはむぞゆしきや」と忠告するように、物語であれば何でもよいというわけにはいかなかった。さらに、「継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを、心見えに心づきなしとおぼせば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける」と、紫上は明石姫君の継母に相当するため、世に多く流布する「継母の腹ぎたなき昔物語」の書写は避けたともしする。光源氏は姫君の好む絵物語を与えはするものの、その作品は人格形成やものの考え方の影響を念頭に置いての選択であり、明らかに教育的効果が働いている。

道兼も、粟田山庄に「世の中の絵物語は書き集めさせ給ふ」と収集をはかっているが、彼とても世に流布するすべての絵物語が対象だったわけではなく、当然のことながら、光源氏と同じく姫君教育にふさわしい作品の選択基準があつたはずである。道兼はあらかじめ一つ一つの作品をチェックし、無難と判断すると書写させたり、また自ら絵の指定をしていたかも知れない。その作業をするのが、「女房数も知らず集めさせ給ひて」とする人々で、持ち込まれた絵物語は、それぞれの分担によって副本作りが進められたはずである。

物語ないし絵物語は、確かに女性を中心とした読み物ではあつたが、それを管理するのは男性の手であり、さらにこのような大規模な書写となると、作品の所在情報や収集能力が必要になってくる。大斎院選子のもとで、女房たちが物語司と和歌司に分れて書写の分担をしたというのは(大斎院前の御集)、女性による作品管理という特殊な例ではあつたが、作業手続きないし組織そのものは、大なり小なり有力貴族の家々にも存在し機能していたであろう。そのような中から、新しい作品も生み出され、興味深い内容との噂が流れると、さまざまなルートを通じて伝播してもいったと思われる。

三 絵物語の製作

「赤染衛門集」に、

との、御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日、あやめ草をてまさぐりにして、けちかうみるをむなつしをとて我宿のつまとはみれどあやめ草ねもみぬほどにけふはきにけり

(一三六)

と道長が歌を詠みかけ、赤染衛門が返歌するという、以下二人による一連の贈答歌五首が収められる。それは道長が作らせたという、五月五日にちなんだ物語を念頭にした、作中人物の立場になつての詠作のようで、あるいはこれは相当する絵の場面に挿入する目的によるのであろうか。歌の配列からすると長徳三、四年(九九七、八)の作とされ、道長は五月の菖蒲をテーマにした物語の創作を人に求めたわけで、同時に複数の作品もできあがつたかも知れない。道長がこのように物語を必要としたのは、当時十歳ばかりだった彰子に読ませるためであつたに違いなく、二年後に彼女は一条天皇の女

御として入内するが、まさに未婚の姫君に対する教育的な配慮が背景にあったとみなされよう。

『赤染衛門集』によると、ほかにも、

殿に、「はなざくら」といふものがたりを人のまいらせたる、つ、みがみにかいたる

かきつむる心もあるをはなざくらあだなる風にちらさずも哉
(二六六)

というのがあり、道長に「花桜物語」が献上され、その包み紙に「他に散らさないでほしい」と書かれていたという。彼はその返歌を赤染衛門にさせているのだが、彼女と物語作者とが近い人物だったことによるのであろうか。これとても、たまたま道長に差し出されたというのではなく、彼の依頼によつて女房が新しく物語を作ったのであり、やがて彰子などの手もとに置かれるようになったはずである。道長にとつては、以下妍子・威子などと続く娘たちのためにも、すでに流布していた絵物語は勿論のこと、このように書けそうな女房には新作を求めることもあったのであろう。

『源氏物語』にしても、中宮の御草子作りの背景には道長が介在していたと思われ、書写作業のため紫式部が部屋を留守にしている間、「局に、物語の本どもとりやりて隠しおきたる」一本を、「やをら、おはしまいて、あさらせ給ひて、みな内侍の督の殿に奉り給ひてけり」(『紫式部日記』)と、盗み出した物語(『源氏物語』と思われる)を次女の妍子に渡すという、流布にもかかわらずいたようである。また、『更級日記』によると、上総大輔が宮仕えの女房から孝標に従つて上総に下向し、帰京後は後一条天皇中宮の威子に仕えたという。離京以前から尚侍だった威子の女房だったのだろ

うが、上総の地に下つての「つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母(上総大輔)などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、とどころ語るを聞くに」とする物語の知識の披露は、彼女の仕えたサロンで吸収したものだったと思われる。このようにたどつてくると、一条天皇をはじめ、彰子・妍子・威子のもとで『源氏物語』が読まれているのは、明らかに道長の意図するところで、道長自身も、また公任も読むなど、貴族社会における浸透に大きな役割を果たしたといえよう。道兼は、まだ姫君が存在しないだけに焦燥するような思いで栗田山庄に絵物語を蓄積していたが、道長は折に触れて新しい物語を作らせ、積極的に姫君たちに読ませることもし、それが結果として『源氏物語』の流布にもあずかることになったといえよう。

道長とて新作だけを追っていたのではなく、評判になった物語などは自邸の工房で女房たちに書写させることもあったはずである。光源氏の六条院でも物語の製作は盛んに進められていたようので、物語論の展開する蜚巻にその様相が次のように記される。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物語などのすさびにて、明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方にたてまつりたまふ。西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読み、いとなみおはす。つきなからぬ若人あまたあり。

例年よりも長雨の続く日々、女性たちにとつて所在のない退屈さを慰めるのは絵物語だったようで、それを読みながら女主人公のほらはらする運命や、男君のすばらしさをおしやべりすることによつ

て明かし暮していたようである。明石上は絵物語に関しても特技を持っていたらしく、奇信女がそうであったように自ら書写し、当時八歳であった明石姫君へ送り届けていたという。このように少女たちは十歳前後になると物語に関心を持つようになるため、姫君を持つ有力貴族の家々では求めに応じて準備しておく必要があった。孝標女などの受領階級になるとそうもいかず、彼女が上京した十三歳の十二月、実母に「物語求めて見せよ」とせがみ、三条宮に仕える親族の衛門命婦から「御前のをおろしたる」と、やつと数点の草子を手入するというありさまである。三条宮は一条天皇皇女脩子内親王(母は定子皇后)で、この年二十五歳であったが、物語は手放すことなく読んでいたのであろう、古くなったのはこのように女房たちに払い下げられていた。さらに「をばなる人」から「源氏の五十余巻」ほかの物語をもらい受けたり、「長恨歌物語」を人から借りるなど、入手にはそれなりの努力をしていたようである。

六条院では、明石姫君だけではなく、九州から上京して光源氏に引き取られるようになった玉鬘にとっても、物語は珍しいだけにたちどころに魅力ある存在として心引かれ、遅まきながら都での新しい文化をむさばるように吸収していった。「明け暮れ書き読み、いとなみおはす」とし、「つきなからぬ若人あまたあり」とあるのによると、玉鬘は絵物語を書写したり、できあがると読んだりして日を過ごしていたようで、またそのようなことに関心があり、能筆で絵心のある女房たちも多かったとする。彼女は六条院入りしてすぐさま物語を目にするようになったらしく、養父となった光源氏の「御心ばへのいとありがたき」を見るにつけ、「親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずやと、昔物語を

見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば(胡蝶)と、物語の知識によって現実の価値判断をしていく。成長して実の親に引き取られたものの、さまざまな辛酸を嘗めるといった悲運な姫君の物語を読んだようで、それに比べると光源氏の心のほどのすばらしさが思い知らされ、玉鬘はすこしずつ「人のありさま、世の中のあるやう」が理解できてきたという。このように、女性にとって世の中を知るには物語を通してであり、物語にはそれだけの効用があったわけで、光源氏はそれを見越した上、親の恩義を知る作品を玉鬘に読ませていたのかも知れない。

玉鬘は、それまでの少女時代の空白を埋めるかのように物語を読み耽り、また女房たちはそれに対応して次々と書写したり、新たに創作することもあったであろう。初めこそ光源氏の親切さに感謝していた玉鬘も、やがて養父の域を越える振舞いに、「さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいっはりにはや、言ひ集めたるなかにも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見たまふ(虫)」と、物語の数を増すにつけ、自分の置かれた立場を客観視して疑問を抱き、数奇な住吉の姫君の運命と重ねる眼を持つようになる。物語の世界が現実の判断基準であるにしても、それだけ彼女は精神的な成長を急速に遂げたといえそうで、これだけでも物語の教育的効果の大きさが知られよう。もちろん大半の女性は喜怒哀楽の感情に浸りながら物語を読み、それによって男女の仲や世の仕組みを知ったのだろうが、時には玉鬘のように懐疑的な意識を持つたり、さらに進むと道綱母のように自ら真実を日記の体裁で吐露する者も出現したのである。玉鬘のもとでは、女房たちが絵物語の書写に励んでいると、光源氏が訪れて「あなむつかし。女こそものうるさから

ず、人にあざむかれむと生まれたるものなれ。……昔かはしき五月雨の、髪を乱るるも知らで、書きたまふ」とからかいのことは投げかけながら、物語論を展開することになる。

光源氏は物語を公的に編纂された国史と同等以上の意義のあることを述べて肯定していくのだが、そのことばの中に「このころをさなき人(明石姫君)の、女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふものの世にあべきかな」と、姫君のもとでも物語が読まれていることを明らかにする。それにかこつけて紫上も絵物語を収集していたこと、光源氏が「この世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ」と姫君の読むべき物語を選別していたことなどは、すでに述べたところである。玉鬘の読む物語にはまったく容喙せず、姫君に対してはこまごまと注文しているわけで、この二人への扱いの違いについて、「こよなしと、対の御方(玉鬘)聞きたまはば、心置きたまひつべくなむ」と、語り手は草子地によって批判する。それだけ光源氏にとって明石姫君の存在は重大であり、将来の後妃がねとして育てるためには、物語一つにしても細心の注意が必要であった。

このようにして、紫上と二人で物語選びが進められるのだが、その場に「宇津保物語」も置かれていたのであろう、

宇津保の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、あやまちなかめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しきところなかめるぞ、ひとやうなめる。

と、紫上はあて宮の人物評をする。あて宮はしっかりした人で間違いはないが、人へのそっけない返歌の仕方は女性らしさに欠けて手本にはならないとする。評判の高い物語ではあっても、思いやり

のない女性が登場するのでは、姫君用として読ませるわけにはいかなかった。「継母の腹ぎたなき昔物語」は避けるのと同じ論理で、物語の興味を持たせながら、そこに姫君の理想的な対応の姿とか詠作が示される必要があったのであろう。女房はそれらの物語を読み進め、時に注釈的に女性のあるべき道を説くこともあったに違いない、そうすることで教育的な性格も付与されたのである。光源氏と紫上とは、このような観点から物語を「いみじく、選り」ながら「書きととのへさせ、絵などにも描かせ」というので、既存の作品を一部書き改めさせたり、絵の場面指定にも直接関与していたと知られる。道長も、物語の執筆を人に求めたにしても、すべてまかせつきりにしたのではなく、できあがるまでには内容に注文をつけたり、挿入する絵にしても指示することがあったと想像される。

四 絵物語の流布

当時の絵物語の書写というのは、たんなるコピーではなく、用途に応じた改作がほどこされ、どのような絵を挿入するかも、家々によって異なったようである。光源氏が明石姫君用の絵物語作成について、「書きととのへさせ、絵などにも描かせたまひける」とするのがそれで、その作業をするにはそれなりの文学的なセンスが求められるはずである。また、絵のない作品の場合には、オリジナルから絵物語用のテキストを作り、それぞれの場面にふさわしい挿絵も描かなければならなかった。そういった意味では、当初から意図して作られた絵物語と、原典を絵詞用に改変し、挿絵も添えることによって出現した絵物語、さらに物語本文に絵を挿入した作品との三種が流布していたはずである。とりわけ長編の作品などを、姫君の

もとですべて読み聞かせたとしても退屈してしまはずで、そうなることある巻なり興味を引くような逸話の部分だけを絵物語に仕立てることもあったのではないか。紫上があて宮の振る舞いを批判して明石姫君の手中にはできないとしたのは、絵物語化された「宇津保物語」が存し、その一部についてたまたま言及したというのではなく、求婚譚だけがまとめられて一帖なり一卷になつていたのでないかと思う。また、「更級日記」に、「世の中に、長恨歌といふ文を、物語に書きてある所あんなりと聞くに」とあるのなども、まさに漢詩からの和文化であり、当然絵も加えられていたであらう。

このように絵物語といつても一様ではなく、オリジナルそのものもあつたし、読みやすくするため手を加えた、いわゆる第二次本も存したと知られよう。絵合に提出された、常則の絵と道風の絵詞による「物語絵」と呼ばれる「宇津保の俊蔭」は、「唐土と日の本とを取り並べて」書かれていたという。同じ俊蔭巻であっても、後半の仲忠母子の山籠りの生活などには触れられていないので、ここでは俊蔭の流浪譚だけが作品化されていたようである。物語絵も第二次本であり、本質的には絵物語の一種といえるが、ただその違いは、前者は場面を主として内容的な連続性が薄かつたのに対し、後者はむしろ絵を従とした物語だつたのではないかと思つている。

どこかで絵物語が作られ評判もよいとなると、有力貴族のもとでは互に貸し借りをして書写したり、また有能な女房などになると本文の改訂や新たな場面の絵画化もはかつたであらう。「夜の寝覚」に「大納言の御方に参りたまへれば、女房、童、はなはなと化粧じで、あまたところどころにうち群れつつ、碁、双六うつもあり、絵物語かきなどするもあり、花をもてあそび、歌を詠み、文を書くも

あり」(巻二)と、女房とか童などの日常生活が点描され、その中で「絵物語」の製作も碁や双六などと同じレベルで語られる。もつとも、今日の注釈書では「絵、物語」と読点を入れて読んでいるが、一語とすべきではないかと思う。いわば絵物語の書写作業は目馴れた光景であり、家々によつてすこしずつ性格が異なりながら流布していった。「風につれなき物語」には、「絵物語なども、いかでめづらしくとかきいでて、たてまつりなどしたまへば」と、なんとか姫君が興じるようにと思つてのことであらう、珍しい趣向を凝らす女房も紹介される。

道長や光源氏などは、絵物語の教育的な効果を重視していたといえ、もともとは女性の心を慰め、語られる内容を楽しむのが本質である。浜松の中納言が吉野の姫君に絵物語を送り届け、それに添えた文に「この絵物語は、みやこだにくらしがたきつれづれのなぐさめと、引きならされ侍を、ましてなにかはなぐさめさせたまふらん」(巻三)と、まさに「つれづれのなぐさめ」物と位置づける。

ほかにも、「絵物語、をかきさまなるあふぎ、たきものなどやうの物につけても、わかき人々の、つれづれなぐさみぬべきなるをば」(「いはでしのぶ」)と、扇や薰物と同じく絵物語は若い女性の慰みとするなど、この種の用例はいくらも拾い出すことができる。上流貴族の姫君だけではなく、さらに受領階級にも読者層が拡大していくと、絵物語の需要はますます増大し、一方では新奇な作品が求められるようにもなる。

孝標女などは、「をばなる人」から「源氏の五十余巻」ほかをもちょうと、「昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかのことなければ」と、声を出して読んだ

のであろうが、ひたすら一人で物語に對していた。⁽¹⁰⁾一方の上流の姫君はとすると、『源氏物語繪卷』東屋巻段にも描かれるように、右近が詞書を読み、浮舟などが絵を見るという役割分担の享受方法であつたと知られる。ほかに資料を求めると、「四十あまりなる尼君、白ききぬのなへはめるにより伏して、絵の物語読みたり。目のかずみて、小さき文字は見えぬこそあはれなれ」(しのびね物語)などと、これも尼君がテキストを読み、姫君が絵を見るという構図で、この種の場面は『岩清水物語』にも見いだすなど、姫君にとつては一般的な享受形態であつた。しかし、中野幸一氏が主張するように、今日的に一人で物語に對するのが眞の読者であり、姫君はダイジェスト版を乳母などから読み聞かされるにすぎないので、第二次的享受であつたとするのは、必ずしも正鵠を射てはいないのではないかと思う。もともと物語は共同の場で語られることから出発しており、耳で聞いて享受する方がより本来の姿であつたはずである。「童にはべりし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく、心深きことかなと、涙をさへなむおとしはべりし」(帚木)と、女房たちも集団の中で物語を共有し、人々は深い感動を覚えてもいる。孝標女のように一人で読み耽けるというのは、むしろ中流層という身分から来ることで、近代的な読者像が當時においても眞の読者であつたわけではない。

あつたと表現することもできるかも知れない。だが、孝標女の読んだ長編の『源氏物語』にしても、すでに道長を中心とする上流層で享受されており、彼女一人が特異な存在だつたわけではない。日記に記される「しらら」以下の作品はいずれも短編と思われ、ことさらにダイジェスト化する必要もなかつた。それに有力貴族のもので作られた絵物語が、女房層まで払い下げられるなどして流布していった様相を見ると、第二次本対オリジナルなどといった厳密な区別などあるはずがなく、作品としては同じものを乳母などが読むか自分が読むかの違いにすぎなかつたと思われる。

荒れはた屋敷でひたすら光源氏の訪れを待つ末摘花は、「古りにたる御厨子あけて、唐守、藐姑射の刀白、かくや姫の物語の絵に画きたるをぞ、時々のみさぐりものにしたまふ」(蓬生)と、上流貴族の姫君であつても、読んでくれる女房などがいないと自ら手にして見ざるを得ない。この作品などは、まだ少女だつた娘に父の常陸宮が読ませようととくに眺えて作らせた絵物語だつたのだから、今では時代遅れになつてしまつたとはいへ、彼女は時折引き出して心慰めるしか方途はなかつた。こういった作品は、一般に流布して定評となつた物語に絵を挿入して作つたようで、とりわけ物語に関心のない親などには無難な選択であつたかも知れない。

物語も含めた絵物語は、このように多くの貴顕の姫君たちの読み物として流布し、それによつて女性の生きる道や男女のことを知つたり、またつれづれを慰める手段としても受容されていった。絵物語が女性ともつぱら深いかかりがあるのは確かだが、その成立には男性が関与していたし、また男社会に流布して読まれてもいたよ

うである。『公任集』によると、

絵物語に、ねびたるやめなるながめてゐたる所

ながむれどもらぬ月のうらやましいかで浮世を出でてすむら

む(三二四)

「とりあつめてぞ」とよめる所

やすからぬしたの思ひも消えぬらしたまたとりあへずこほりゆく

には(三二五)

「菊は濃きこそ」といへる所

いかばかり契りし花の露ならむおきてしもいとあはれとぞ思ふ

(三二六)

などとあり、絵物語の場面に公任が歌を詠み加えたことが記され、この後にも一連の歌であろうか、さらに四首を見いだす。一首目は山里に出離して隠棲する姫が月影を眺めている場面なのである、澄む月に比べていつまでも悟りきれない我が身を恨む歌となっている。「絵物語」とあるため本文も付されていたはずで、公任はその内容に添い、姫の思いを歌に託して表現したことになる。これは「大和物語」百四十七段に見える、温子皇后のもとでの「生田川伝説」にもとづき、絵物語に伊勢御などの女房たちが作中人物の心になつて歌を詠じたり、能宣が「住吉物語」の「歌なき所々」に新たに創作して加えたのと軌を一にするであろう。以下続く歌は、また別の作品なのか、姫が若い頃を回想するのによつて展開する物語だったのかは不明だが、公任が絵物語を読んでいたのは確かである。

男性の手によつて作られた物語は、絵をとまなうことによつて女性の専有物の観を呈するほどその社会に浸透し、やがて女性自身はその製作を分担し、さらに創作へも参画していった。上流貴族などは、それを姫君の教育へも利用するなど、絵物語は多様な読まれ方

をするようにもなる。かつては「女の御心をやるもの」とされた物語だが、平安中期の頃には男性社会にも還元されるようになり、資料は見い出せないものの、かなり広範囲の読者層を得ていたのではないかと思う。しかし、何といつても「源氏物語」の出現は、物語への考えを一新したようで、一条天皇や公任も読んでいたように、絵物語も含めて物語は平安貴族の世界に大きな位置を占めるようになったのである。

注

1 松村博司編「栄花物語の研究・校異篇」(昭和六一年刊、風間書房)私に、漢字・句読点を付した。

2 「小右記」(八月二十七日)では、七カ月目の早産とし、また死産ではなく、生れてすぐに亡くなったとする。

3 拙稿「物語絵考」(『国語と国文学』平成二年七月号)

4 拙稿「物語文学の成立」(鈴木一雄編「日本文学新史(古代Ⅱ)」所収、平成二年刊、至文堂)

5 熊本守雄著「惠慶集校本と研究」(昭和五三年刊、桜楓社)

6 「赤染衛門全釈」(風間書房)

7 拙著「源氏物語の謎」(一九八三年刊、三省堂)

8 「大斎院前御集」によると、物語が書写される一方では、必要でなくなった作品は女房たちに下されてもいた。このようにして、物語は受領階級へも伝播していったと思われる。

9 注3参照。

10 玉上琢弥氏は物語音読論により、文は女房とか乳母が読み、姫君が絵を見る享受方法が正当であった(『源氏物語研究』昭和

四一年刊、角川書店」とするのに対し、中野幸一氏はそれはいくまでもダイジェストによる第二次的な享受であり、むしろ真の読者は中流女性であったとする〔物語文学論攷〕昭和四六年刊、教育出版センター〕。

——大阪大学文学部助教授——